

Title	ヒューム奇跡論の研究
Author	中西, 貴裕
Citation	人文研究. 67 卷, p.105-122.
Issue Date	2016-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	湯浅恭正教授 : 美濃正教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

ヒューム奇跡論の研究

中西 貴 裕

デイヴィッド・ヒュームは証言の役割と価値とを認識していた数少ない哲学者の一人である。また、彼は歴史的奇跡の検討にも関心を抱いていた。さて、ある注釈者らは、「奇跡について」において彼は本物の奇跡をアプリアリに拒否した、ないし排除したと論じている。彼らによれば、ヒュームにとって奇跡とはまさにその本性によって自然法則ないし経験の斉一性に反しており、それ故信じるのが合理的とはなりえない。この解釈は広範に受け入れられているが、誤っているか、少なくとも誤解を招くものであるように思われる。第一に、ヒュームの狙いは奇跡が起こりえないことを証明することではなく、証言一般を評価する合理的基準を提示することにあった。第二に、報告された奇跡（と想定されているもの）は、その定義や本性によってではなく、先ほどの基準によってアポステリオリに検討されるべきである。この解釈を証明するために、本稿において筆者は証言を構成する二つの要素、すなわち「証言者の質」と「証言内容」を導入する。そしてもし前者の評価が極めて高ければ、内容がいくぶん信じ難いものであっても、報告された出来事は信じる余地がある。

0. はじめに

デイヴィッド・ヒュームは『人間知性研究』（以下『知性研究』と略記する）の第X節において奇跡（miracle）を論じている。しかし、一読すれば分かるように、本節で一貫して考察の対象となっているのは奇跡の生起を支持する証言（testimony）とその信頼性の評価であって、奇跡それ自体の本性や生起可能性ではない。より直裁に言うならば、彼の問いは以下のような形式をとるように思われる。すなわち「奇跡の生起を支持する証言は、奇跡（奇跡一般）を合理的に信じるに足る力を持ちうるか」「宗教的奇跡の場合、証言は宗教体系を確立しうるか」である。

こうした問題設定はヒュームの著作の読者にとってはお馴染みのものである。例えば、彼は因果性の分析に際し、原因－結果の出来事の間客観的な因果性のようなものが実在するかどうかではなく、いかなる条件下で我々が因果的信念を抱くに至るかを考察した。あるいはまた、物体が実在するかどうかではなく、物体が実在するという信念の正当化可能性を問うた。このように、精神哲学者を自認するヒュームにとって主たる解明すべき対象は、我々の知識や信念の形成メカニズムである。彼が奇跡論において奇跡そのものではなく、奇跡についての信念を論じるのも、そうしたプログラムの一環であると言えるだろう。

さて、ヒュームに関する伝記的事実によれば、本節「奇跡について」(“Of Miracles”)は彼の最初の哲学的名著である『人間本性論』(以下『本性論』と略記する)の公刊前にはその一部として書き上げられていたが、世間の否定的反応を考慮して『本性論』から削除され、彼が自らの文才に自信を得た十数年後に満を持して『人間知性に関する哲学論集』(後に『人間知性研究』に改題)の一節として世に問われたという。しかしながら、案の定と言うべきか、およそ宗教的奇跡の可能性を否定するその議論は、無神論的精神の産物だとして同時代の宗教者らから(幾分の外れなものも含め)批判・論難を受けた⁽¹⁾。そればかりではなく、ヒュームが再評価され本格的研究が盛んになるとともに、信仰や神学を抜きにした純粋な哲学的見地からも、議論に欠陥があるとして批判する声が上がってきている。例えば批判者の急先鋒であるイアマン(J.Earman)は、ヒュームの奇跡論は「無惨な失敗」であり、その目的を達成できていないばかりか目的そのものが曖昧で混乱し、彼の議論自体、殆ど先人か同時代人からの借り物に過ぎないと断ずる(Earman [2000] p.3)⁽²⁾。ヴァンダーバーグ(W.L.Vanderburgh)は奇跡論を取り巻くこのような状況を巧みに表現している。すなわち『奇跡について』はヒューム自身の時代から論争における避雷針であり、それは今も変わっていない(Vanderburgh [2005] p.38)。

だが、雷が避雷針に集中するかのごとく、ヒュームに対する批判者が専ら奇跡論のテキスト(『知性研究』第X節)ばかりを取り上げて解釈する傾向がまま見られるのも事実であるように思われる。奇跡論が単独の完結した著作ならばいざしらず、そうした近視眼的手法によって妥当な解釈を得られる見込みは甚だ怪しいと言わざるを得ない。実際、詳細は後述するが、ヒュームの奇跡論で用いられる主要概念、例えば「立証(proof)」や「蓋然性(probability)」等の彼の哲学における独特・固有な含意について予備知識を持ち合わせていなければ整合的な理解は難しい。そして、そうした予備知識は奇跡論を『知性研究』の関連する議論と適切に結び付けることで初めて得られるのである。⁽³⁾

本稿の目的は、適宜『知性研究』の関連する議論を参照しつつ奇跡論を精読・検討してその整合的な理解を目指すことである。具体的な流れとしては、①奇跡論(第X節)第一部の議論を辿りながら、彼の証言一般の評価に関する方法論、及び基本概念を確認する。その上で、末尾に置かれた、奇跡の生起を支持する証言の信頼性を評価するための「一般的格率(general maxim)」を検討する。ここでヒュームは証言の信頼性を評価するに際して必ずしも数量的な計算をしているのではないこと、あるいは奇跡の生起が不可能な事態としてアプリアリに排除されてはいないことが確認される。②続いて、第二部でヒュームが提示する奇跡(的出来事、及びそれを支持する証言や記録)の例とそれらに対し彼が下した評価を検討する。しばしば「ヒュームは奇跡一般の生起の可能性を否定してはいなかったが宗教的奇跡に関しては不当にそれを否定している」という批判があり、実際それを示唆するかに見える強い表現も散見され

るが、そうした解釈は必ずしも正確でないことが確認される。ヒュームが宗教的奇跡を支持する証言を退けるのは、彼の経験論哲学からの自然な帰結である。

1-1. 証言一般の評価に関する予備的考察

従来、奇跡論第一部については末尾の「一般的格率」ばかりが取り上げられてきた感があるが、それに先立つ議論も重要である。なぜなら、因果性や蓋然性に関するこれまでのヒュームの考察を下敷きにした、証言一般の信頼性を評価する基準について述べられているからである。

手始めにヒュームは、①事実に関する推論において経験が唯一の導き手であること、②事実に関する推論は出来事との接続の程度に応じて最高度の確実性から最低度の蓋然的証拠までをもたらし、③賢明な人は、証拠同士が対立する場合はより多くの経験に支えられた方を選ぶべきこと、④賢明な人の判断においてさえ、彼が根拠とした証拠は、後述する「固有の意味の蓋然性」に過ぎないこと、を手短かに論じている。(E110-111)

これらの主張は概ね『知性研究』第IV～第VII節でなされた因果推論に関する議論の再確認と言ってよいが、フォグラン (R.J.Fogelin) も指摘するように (Fogelin [2003] p.5)、証言一般の評価についての枠組みを半ば構成しているように思われる。それ故、各々の主張についてより詳細な説明・補足を加えたい。

①ヒュームが『知性研究』第IV節の冒頭において推論の全対象を観念の関係 (relation of ideas) と事実とに二分した事はよく知られている。前者には幾何学・代数学等が含まれ、それらの命題は知性の作用のみによって発見可能であり、論証的に確実で、その否定は矛盾を含むとされる。他方、後者に属する命題の真偽は経験によってしか確かめられず、その否定ないし反対は矛盾を含まない。「矛盾を含まない」とは論理的にもしくはアприオリに不可能ではないということ、その内容を判明に想像することができるということである。(E25-26)

また、ある事実を述べた命題の否定ないし反対が矛盾を含まないということは、たとえそれ (反対の事実) が到底ありそうもないと我々が考えても、そして実際これまで経験した限りでは起こらなかったとしても、生起する可能性は否定できないということを指す。

②同様のことが事実 (出来事) に関する推論についても言える。Pという種類の出来事の後にはこれまで経験した限りでは常にQという種類の出来事が伴ってきた (PとQの恒常的接続) からといって、Pが原因・Qが結果であってPは今後も常にQを引き起こす、という判断は絶対的に確実 (アприオリな真理) ではない。Pが起きたのにQが起こらない可能性は依然とし

て開かれている。ヒュームの有名な例を借りるなら、ビリヤードにおいて第一のボールが第二のボールに向けて突かれ転がっていく (P) 場合、衝突後に第一のボールは停止し衝突された第二のボールが転がり出す (Q) のではなく、どうしたわけか両方のボールが完全に停止したり第一のボールが戻ってきたりする可能性は、論理的には排除されていない。(E29-30)

では、なぜ我々は、想定しうる全ての可能性の中から特定のものを優先させ、その発生を期待するのか。換言すれば、何が因果推論を可能にしているのか。ヒュームによれば、それは過去の経験の集積により生まれた習慣と、「未来は過去に似るだろう」という自然の斉一性に対する確信である。そして、これまである原因が一定の結果を完全に例外なく生じさせてきたということ、別の原因は必ずしも一定の結果を生じさせるとは限らないということ、これらは経験によって知られるのであり、また、その結果が生じる蓋然性の程度に応じて人々に推論への確信度を与えるのだという。ヒュームは、上記のような専ら経験によってアポステリオリに知られる蓋然性を「原因の蓋然性 (probability of cause)」と呼び、サイコロを振った際の出目の確率のようにアプリオリに計算されうる「偶運の蓋然性 (probability of chance)」から区別している⁽⁴⁾。(E56-59)

③まず、ヒュームはここで「賢明な人」という限定を付けているが、それ以外にも本節には「知者 (the wise)」や「有識者 (the learned)」といった表現が比較的多い。彼が本書の第 I 節冒頭で、しきりに自分の哲学は平易・明快であり、知者や有識者でない多数の一般人向けであると強調していたことからすれば (E5-7)、奇異な印象を受けるかもしれないが、本節に関する限りその類の語は「良識を持ち、軽信・迷信に陥らず証言を冷静に評価する人」を指している。ヒュームは『本性論』では「軽信」を人類の最も普遍的で顕著な弱点とみなし、概して人類には他人の証言を何の検討もせず信じてしまう傾向があるという旨を述べてさえいたが、本節ではそのような弱点を克服する術を論じていると考えてもよさそうである⁽⁵⁾。

また、複数の証拠 (証言) が対立している場合はより多くの体験に支えられている方を選ぶべきであると述べられているが、この箇所では奇跡ではなく通常の出来事同士の対立を論じていることに留意しなければならない。というのも、奇跡の生起を伝える証言は、その体験者の僅かな奇跡の経験に支えられているのに対し、奇跡の生起に反対する過去の経験は無数に存在するのであり、両者を単純に数的に比較すれば奇跡の否定が勝利を収めるのはほぼ自明だからである。しかし、実際のところ、ヒュームは奇跡を支持する証言の評価 (「一般的格率」) においてこのような手法は用いていないように思われる。

④ここでヒュームはやや唐突に「我々が固有の意味で蓋然性と呼ぶもの」について語り出す。原文は “what we properly call *probability*” だが、properly の訳はさしあたり「固有の意味で」

でも「厳密に」でも「適切に」でも大差はなく、いずれにせよ、これまで用いてきたよりも何らかの点で狭義の蓋然性を指していることは明らかである。では、狭義の蓋然性ということでヒュームは何を意図しているのだろうか。それを明らかにするために、ひとまずこの段落を引用してみよう。

…賢明な人は彼の信念を証拠に比例させる。不可謬な経験に基づく結論においては、彼はこの上ない確信度をもってその出来事を期待し、自分の過去の経験をその出来事が未来にも存在することへの十全な (full) 立証 (proof) とみなす。その他の場合においては…彼は相互に対立する体験 [の証拠力] を比較考量する。彼は…その [多くの体験に支持されている] 側へと疑念と躊躇を持ちつつも傾いていく。そしてついに彼が自分の判断を決定する時でさえ、その証拠は我々が固有の意味で蓋然性と呼ぶものを超えることはない。(E111)

ここまで引用した限りでは、事実に関する判断において、証拠が不可謬な経験に基づく場合と証拠同士が対立する場合とが対比させられている印象を受ける。そして前者は十全な立証に基づいた確実な判断を、後者は蓋然性 (見込み) に基づいた不確実な判断をそれぞれもたらす、と述べられている。だとすれば、狭義の蓋然性とは、立証とは厳然と区別される不確実な見込みのようなものなのだろうか。引用をさらに続ける。

それ故、あらゆる蓋然性は諸体験や諸観察の間の対立を前提としているのだが、この対立においては一方の側が他方の側に勝利し (overbalance)、その優位性に応じた証拠の度合いを生み出していることが明らかになる。(E111)

ここで「あらゆる蓋然性は」と述べられているが、これをヒュームの用法における広義の蓋然性と捉えるのは誤りである。なぜなら、広義の蓋然性には先述の「偶運の蓋然性」も含まれていなければならないが、その種の蓋然性は定義上アプリオリに算定されるので「諸体験や諸観察の間の対立」を前提する必要はないからである。つまり、ここでは既に「偶運の蓋然性」を含まない狭義の蓋然性について語られている。従って、さしあたり「固有の意味の蓋然性」は「原因の蓋然性」に属し、かつ「立証」と区別されるものを指す、と考えてよさそうである。

1-2. 論証・立証・蓋然性

とはいえ、ここで蓋然性と立証の区別、あるいは十全な立証は確実な判断をもたらすと述べられる際の「確実」の含意などを深く掘り下げないまま次の段階へと進むのは危険である。具

体的には、例えば、蓋然性と立証の対比を強調する余り立証＝絶対的（客観的）に確実な証拠、などと早まって理解してしまうと、本節第一部の末尾に近い部分に見られる「立証に反対する立証（proof against proof）」という表現の意味するところが分からなくなってしまう。あるいは、「奇跡に反対する立証は、事実の本性そのものからして、およそ想像されうる限りの経験に基づくあらゆる議論と同様に完全なのである」という一文があるのだが、あたかもヒュームがここで奇跡の生起をアプリアリに却下しているかのように理解してしまうかもしれない。従って、立証というテクニカルタームの意味を精確につかむことは、奇跡論の理解にとっては必須と言えるだろう。

立証と蓋然性（狭義の蓋然性）との関係は、「論証（demonstration）」という第三の項を登場させることでより理解が容易になる。結論を先回りして言えば、立証と蓋然性の違い（区別）は程度の差であって、決して対立する概念ではない。

実は、ヒュームは第Ⅵ節『蓋然性について』（“Of Probability”）の注において、既にこの三個の概念を登場させていた。立証概念の理解に大きく資するものであるので全体を引用しよう。

ロック氏は、あらゆる議論を論証的なものと蓋然的なものとに区分する。この見地からすれば、全ての人は死ぬに違いないとか、太陽は明日昇るであろう、といったことは蓋然的であるに過ぎない、と我々は言わねばならない。しかし、我々の用語法をより普通の用法に適合させるには、我々は議論を論証、立証、蓋然性に区分するべきである。立証の意味するところは、疑いや反対の余地を残していないような、経験に由来する議論である。（E56n）

上記の引用は、一読する限り、ヒュームは議論に関するロックの二分法に不満を感じていたので第三の選択肢（概念）として新たに「立証」を導入したと読める。そのような解釈は概ね正しいのだが、留保を要する。

すなわち、既に触れたように、論証は観念間の関係を対象とする経験に頼らない議論である。それに対し、ここで立証は経験に由来（依拠）する議論であると明言されており、この点では蓋然性（原因の蓋然性）に関する議論と同様である。従って、これらの三つの項目を大別するならば、一方に論証、他方に立証及び蓋然性、とするのが適切であろう。

ここでややまぎらわしいのが「立証は疑いや反対の余地を残していない議論である」という表現だろう。というのも、観念間の関係を対象とする論証的命題、例えば「三角形の内角の和は、五角形の内角の和の三分の一である」もある意味では「疑いや反対の余地を残していない」

ように思われるからである。

だが、両者は本質的な点で異なる。論証から得られた結論に対する疑いや反対は、論理的矛盾を含むのでそもそも思い浮かべることができないとされている。従って論証が確実だという場合の確実性は絶対的・論理的な確実性である。それに対して、立証がもたらす確実性（確信）は、たとえ疑いや反対の余地がない程に高まっても主観的・実践的な確実性に過ぎない。具体的に言えば、一定程度まで達すればそこで推論が止まり、信念が形成され、その信念に基づいて行為が生じるような種類の確実性である。

フォグランは「一種の精神的確実性（moral certainty）を形成する程に証拠が強い時、さらなる証拠に対する関心は減退する」と述べているが（Fogelin op.cit, p.46）、これは示唆するところの多い指摘であるように思う。つまり、さらに客観的に確実・精確な証拠は存在しないのではなく、大抵の場合、我々にあえてそれを求めようとする探究心が起きないのである。

1-3. 証言者の質と証言内容

さて、ヒュームは以上のような予備的考察に続き、証言者の質ないし資格とでも言うべき概念と、それを低下させる諸要因を論じる。証言者の質とは、証言内容（証言が確立しようとする出来事）を抜きにして考えた時、証言者がどれだけ信頼に値するかの程度である。

ヒュームの挙げる例では、その目撃者（証言者・報告者）が①目撃者同士で相互に矛盾する場合、②ほんの僅かしかいない場合、③疑わしい性格の場合、④主張している事柄に関して利害関心を持つ場合、⑤躊躇しながら証言を伝える場合、⑥必要以上に激しい断定口調で証言を伝える場合、我々は疑念を抱くという（E112-113）。

ここで強調しておきたいのは、理想的条件下において、以上のような要因が存在せず、従って証言者の質が完全に確保されている場合、その証言は内容の如何に関わらず立証となりうる、という点である。ヒュームが先の箇所「その〔奇跡を支持する〕証言が、単独かつそれ自体において（*apart and itself*）考察された場合、十全な立証に到達すると想定してみよう」（E114）と述べているのはそのような事態を指している。

とはいえ、当然ながら、質が保証されているからといってその証言内容を鵜呑みにしてよいわけではない。証言者の質の評価においては証言内容は棚上げされていたが、それとは別個に証言内容の評価も必要だからである。ヒュームはこのように言う。

例えば、証言が確立しようと努めている事実が、並外れた（*extraordinary*）、あるいは驚くべき（*marvellous*）性質を帯びていると想定しよう。この場合、その証言から由来する証拠の力は、その事実の異常さの大小に比例して、多かれ少なかれ減衰を受け入れる。

(E113)

ヒュームはこの段階ではまだ本物の奇跡について語っておらず、それゆえ「並外れた」や「驚くべき」といった語は奇跡とは明確に区別される「驚異」を意味している、という解釈は可能ではある。ヒュームの定義によれば、奇跡とは自然法則に対する侵犯であるが (E114-115)、驚異はどれだけ稀であり異常に見えるとしても、究極的には自然法則によって説明可能な現象だと考えられている。

だが、この箇所に関する限り奇跡と驚異の区別はあまり意味を成さないと考えてよい。驚異的な出来事は、たとえその原因・原理をある程度把握していても、蓄積された過去の経験と対照する限りでは「並外れた」「驚くべき」ものに見えるであろうし、さもなくばそもそも驚異の名に値しないだろう。それゆえ、ここで提示された「証言の信頼性はその内容の異常さに比例して減衰する」という原理は、奇跡を支持する証言の評価においても適用されうると思われる。

1-4. 一般的格率

これまでの証言一般の評価に関する予備的考察、並びに注意を要する概念の検討を経た上で、ようやくヒュームの「一般的格率」の解釈が可能となる。奇跡的出来事を支持する証言の評価は、証言一般の評価の特殊例だからである。彼はこう述べている。

明白な帰結は（そしてこれは我々の注意に値する一般的格率であるが）以下の通りである。「いかなる証言も、その証言が確立しようと努めている事実 [の奇跡性] よりも、その虚偽性 (falsehood) の方が奇跡的であるような種類のものでない限り、奇跡を確立するには十分でない。また、その場合でもそこには議論同士による相互破壊 (mutual destruction) があり、優勢な方から劣勢な方を差し引いた後に残る力の程度に相当する確信が我々に与えられるに過ぎない」。(E115-116)

これを無理なく理解する為には、第一に、ここで比較・対立させられているものは一体何を指しているのかを明らかにせねばならない。

「証言が確立しようと努める事実」が、先ほど挙げた区別に従えば、証言内容を示していることは明白であろう。問題は、「その虚偽性 (its falsehood)」をどう解釈するかである。「その」が「事実」にかかるとすれば証言内容の虚偽性を指していることになり、「証言」にかかるならば証言自体の虚偽性、換言すれば証言者の質の虚偽性を指していることになる。

仮に「その虚偽性」が「証言内容の虚偽性」を指しているとしよう。その場合は、ある証言内容の奇跡性（信じ難さ）と証言内容の否定の奇跡性（信じ易さ）が比較されていることになり、後者が上回った場合のみ、奇跡の生起を信じるのが合理的であるということになる。しかし、奇跡は定義によって自然法則に対する侵犯であり、それに反する斉一的な無数の経験（証拠）が存在するとされている。また、以前確認したように、賢明な人は、証拠が対立する場合は多くの経験に支えられている方を選ぶべきであるとヒュームは述べている。だとすれば、この場合、後者が上回るということは、奇跡の定義からして不可能ということになる。なぜなら、後者は「奇跡が起こらないことの奇跡性」であり、その値は限りなくゼロに近いからである。これは、奇跡の生起を支持する証言を完全に却下する議論だと言える。

だが、「その虚偽性」が「証言内容の虚偽性」を示すというこの解釈には難点がある。即ち、仮にこの解釈が正しいならば、そもそもヒュームはこう長々と奇跡を論じる必要はなかったであろうということである。奇跡を定義した上で、賢明で合理的な人間は証言内容のみを検討し、自然の斉一性に支えられている側を採用すればよいと述べれば十分だったはずである。しかし、これは明らかに彼の意図ではない。あるいは、なぜ彼が証言者の質とその評価について論じ、奇跡を支持する証言も一定程度の質を具えていれば十全な立証になりうる、などと述べたのか、その真意も見えなくなってしまう。

以上のような理由から、「その虚偽性」は「証言者の質の虚偽性」を指している、と解釈することにしたい。それでは証言者の質の虚偽性とは何だろうか。ここではfalsehoodは欺瞞性と訳した方が分かりやすいかもしれない。つまり、証言者の態度が真実味を欠いている、もっともらしくない、信用できないということである。

さて、端的に言えば、この「一般的格率」では一つの証言に対する二種類の評価、すなわち証言者の質に対する評価と証言内容に対する評価とが比較・対立させられていると考えるのが妥当である。二種類の評価は、それぞれ信念を生む程度に高まれば立証となるであろう。そして、仮に一方が奇跡の生起を支持する立証となり、他方が否定する立証となったならば、それらは対立するだろう。これこそが、ヒュームの言う「立証に反対する立証（proof against proof）」(E114)である。

それでは「一般的格率」（の前半部）は何を言っているのか。ルート（M.Root）は以下のように定式化している。Aが証言者、Bが判断者、pが証言内容である。

pが生じたというAの証言に基づいてpを信じるのがBにとって合理的であるのは、以下のような場合でありその場合に限る。それはAの証言の信頼性（つまりAの誠実さやp

に関するAの権威)がBにとってのpの信じ難さ(つまりBの世界観に基づきpが偽である蓋然性)を上回る時である。(Root [1989] p.429)

この定式化は妥当と言ってよいと思われるが、ルート自身も述べているように、証言者の信頼性と証言内容の信じ難さとが共通の尺度で測られることを前提にしている (Ibid.)。しかしこの前提については疑う向きもあるかもしれない。「一般的格率」の後半部で「優勢な方から劣勢な方を差し引く」と述べている以上、ヒュームは数値化されうる基準を想定しているかに見えるが、証言者の質も証言内容も共に主観的な基準であり、それらは数値化も比較もできないだろう、という批判である。

しかし、証言を評価する方法・尺度がただ一つであると考えの方がむしろ現実に即していないのではないだろうか。例えば、判断者の経験と知識に基づく限りその真偽が全くの五分であるような事柄があるとすれば、ひとまず判断を保留するのが合理的な態度と言えるだろう。しかし、多数の誠実な人たちがその事柄の偽を証言し、虚言癖で有名な人物がただ独りその事柄の真を証言したならば、我々が双方の証言を評価する際の天秤は前者(事柄の偽)に傾くのではないだろうか。

ヴァンダーバーグは、証言・証拠を評価する際に非数量的理論 (non-numerical theory) を用いることは必ずしも正確さや厳格さを放棄することを意味しない、と述べている。彼によれば、温度について語る際に数量的な尺度がなくても「暑い」「寒い」「～より暑い」といった概念が可能なのと同様に、蓋然性を評価する際も「ありそうな」「なさそうな」「～よりありそうな」といった概念のみで十分な場合がある、という。(Vanderburgh op.cit, p.54)⁽⁶⁾

実際、ヒュームの「優勢な方から劣勢な方を差し引く」という表現に固執するあまり、彼に蓋然性に関する数量的理論を帰属させようとする方が、かえって根拠の不明な前提に基づいているように思われる。「一般的格率」の核心が「議論同士の相互破壊」にあることを忘れるべきではない。

さて「一般的格率」に話を戻そう。以上の解釈が正しいとすれば、証言者の質が全く疑念を許さぬ程に完璧であり、証言内容(奇跡の生起)に僅かでも蓋然性がある場合、その証言は合理的に信じるに足る可能性があるということになる。従って、この格率においては奇跡を支持する証言がアプリアリに却下されてはいないばかりか、奇跡を支持する証言を合理的に信じてよい可能性があるように見える。また、ヒュームはそのような例(死者の復活!)を想定して第一部を締めくくってさえいる。(E116)

ここまでの議論で「一般的格率」の無理のない解釈にはひとまず達したと言える。だがそれは、ヒュームが「一般的格率」の条件を満たす証言が事実として存在したと考えていたことを意味しない。第二部では、彼は奇跡の生起を支持する証言の例を数個挙げ、それらが「一般的

格率」をクリアしているか否かを検討している。また、特に宗教的奇跡（を支持する証言）に着目し、それが宗教体系を確立するだけの力を具えているかどうか考察している。我々もその作業に従うことによって初めて、ヒュームの奇跡に対するスタンスを定められるだろう。

2-1. 奇跡の再検討

第二部の冒頭で、ヒュームはこのように宣言している。

これまでの議論において、我々は、ある奇跡の根拠となっている証言が十全な立証にまで達するかもしれないこと…を想定してきた。しかし、我々が、我々の譲歩に関してあまりに寛大であったこと、そして、そのような十全な証拠に基づいて確立された奇跡的出来事などかつて存在しなかったこと、これらを示すのは容易である。(E116)

奇跡を支持する証言を信じるのが合理的であるためには、その証言者が完璧な質を具えていることが必須である点は既に示した。そして第一部の末尾において、ヒュームは理想的条件下ではそれが達成されうると示唆していた。しかしそれは、彼によれば「あまりに寛大」な「譲歩」だったという。歴史的・経験的事実としてそのような条件を満たす奇跡的出来事の証言はこれまで存在しなかったことを示すのが第二部の目的である。

ヒュームは四種類の経験的事実に基づく批判的根拠を挙げる。

①良識・誠実さ・信用を具えた多数の人々により証言された奇跡は歴史上存在しない。あるいは、世界的に著名な場所で公然と生じた奇跡的事実は存在しない。(E116-117)

これは、既に触れた「証言者の質」を担保する諸条件を、より厳格に再定義したものだと言ってよいだろう。また、「世界的に著名な場所で公然と証言された」という条件が新たに加わっている点も重要である。

②奇跡の証言は「驚愕と驚嘆 (surprise and wonder)」という心地よい情念を人々に与える。あるいは、他者にその種の情念を与えることに、証言者は自尊心や喜びを見いだす。こうして虚栄心や私利私欲によって奇跡が捏造され、人々はそれを軽信してしまう。(E117-118)

第二の根拠は、情念によって人々が奇跡を欲し、また奇跡が捏造されるという心理的メカニズムを記述したものである。ヒュームにとって、人間理性が大抵の場合情念の奴隷であるということは自明の事実であった。

③超自然的で奇跡的な物語は無知で未開の国民の間に主として満ち溢れている。あるいは、もし文明化された人々がそうした物語を承認したとしても、それは無知で未開な祖先から継承した結果である。他方、人間はあらゆる時代に嘘をつくものであるし、詐術は発展していく。

それに対し知者はそれら詐術を個別に検討・論破せず嘲笑するだけで満足してしまう。結果、奇跡はいつまでも語られ続ける。(E119-120)

第三の根拠では、奇跡的な物語が見出されるのは主として「無知で未開の」人間の時代においてであったことを指摘し、それは賢明な人間にとっては退けられるべきものであると示唆している。

④宗教的奇跡を支持する証言は、特定の宗教体系を確立するのが直接目的であるから、それは間接的にその他の全ての宗教体系、及びそれを確立しようとする奇跡の信頼性を破壊する力を持っていることにもなる。従って、宗教的奇跡を支持する証言は相互に対立しあっていることになる。こうして証言の共倒れが起こり、我々はそのいずれをも信用することができない。(E121-122)

これは特に宗教的奇跡に的を絞った批判であり、宗教的奇跡一般の信頼性を低下させる強力な議論であるように思われる。奇跡の証言によって何らかの宗教体系が確立される可能性はおよそこの議論によって否定されているとみてよい。だが、次節で確認するように、ヒュームが個別の宗教的奇跡を支持する証言を退ける際にこの議論を直接援用しているのではないことには注意が必要である。すなわち、彼はより経験に依拠した議論からそれらを拒否しているのである。

2-2. レー枢機卿とサラゴサの奇跡

ここからは、ヒュームが挙げている奇跡の実例とそれに対する彼のコメントを検討していく。最初は、レー枢機卿 (Cardinal de Retz) が記したとされる奇跡譚である。すなわち、レー枢機卿はサラゴサの聖堂で、長年その門番を務めていたという男と会った。その男は元々片脚を失っていたが、切断した脚の付け根に聖油を擦り込んだところ、失くした脚を取り戻したという。また、この奇跡は教会の聖職者のみならず、街の関係者らによっても証言されているという。(E123-124)

しかし、ヒュームによれば、この話を報告したレー枢機卿自身はこの奇跡を全く信じていないばかりか、反証にすら値しない明白な虚偽であって、議論よりはむしろ嘲笑に相応しい話題だと結論したのである。そしてヒュームは彼のそのような態度を「正しい理論家」のものだと称賛する。(E123-124)

ヒュームに対する批判者は、レー枢機卿に対する称賛に、ヒューム自身の宗教に対する偏見を嗅ぎ取るかもしれない。確かに、宗教的奇跡は反証にすら値せず嘲笑で応えるのが相応しいという強い表現は、宗教的奇跡（及びそれを支持する証言）を一顧だにせず退けているようにも見える。

だが、ここで想像力を逞しくするならば、レー枢機卿は立場上このような奇跡譚に常々触れていた、むしろ辟易さしていた可能性は高いのではないか。また、失った片脚を取り戻したという男との会見も、枢機卿がやって来るということでそのお墨付きをもらおうと急遽設定されたものではないだろうか。ヒュームによればレー枢機卿は「ものごとを軽々しく信じない自由思想家的性格の持ち主」であったという。だとすれば、過去の経験に基づいて（証言者の質が劣悪なので）「今度の奇跡譚もペテンだ」と断定する権利は彼にとっては許されているのではないだろうか。それはヒュームにとっては「正しい理論家」に相応しい推論である。従って、ここでは宗教的奇跡がアプリオリに退けられているわけではない。

2-3. 八日間の暗黒・女王の復活

続いて取り上げる二つの奇跡的出来事は、現実に証言や報告が残っているものではなくいわばヒュームが議論のために提出した思考実験である。また、それらは仮定によって、宗教的奇跡ではない（何らかの宗教体系の確立を意図して提出された奇跡でない）とされている。そして、結論から先に言えば、ヒュームは一方の奇跡に対してはその証言を信じるのが合理的だと示唆し、他方に対しては全く信じられないという評価を与えている。こうした対照的な評価の根拠を考察することによって、奇跡一般に対する彼のスタンスはより正確に定まらう。

第一の奇跡は、千六百年の一月一日から八日間にわたって地球全体が完全な暗黒に包まれたというものである。また、この事件はあらゆる著者があらゆる言語で記録しており、しかもその伝承が現在に至るまで世界中に残っていると想定せよ、とヒュームは言う。

ヒュームによれば、この「八日間の暗黒」の内容は確実なものとして受け入れるべきである。ただし同時に、学者はその発端となりうる原因も探求すべきだとも彼は述べる。(E127-128)

第二の奇跡は、エリザベス女王が千六百年の一月一日に死去し、死の前後の様子は医者と宮廷人によって確認されたのだが、埋葬の一ヶ月後に女王が再び現れ、復位し、その後三年間英国を統治したというものである。また、この経緯は英国史を扱う歴史家達により述べられていると想定せよと言う。

ヒュームは、このような奇跡的出来事は少しも信じる気になれないと告白する。これは明らかに偽装された死であって、事実では有りえない。(E128-129)

便宜上、前者を「八日間の暗黒」、後者を「女王の復活」と呼ぼう。これらは共に宗教的奇跡ではないとされているのに、なぜヒュームは前者を信じることを認め、後者については認めないのか。ヒュームと同時代の人物であり厄介な論敵でもあったウォーバートン

(W.Warburton)によれば、「八日間の暗黒」も「女王の復活」もヒュームの言う経験の斉一性に反しており、同程度に奇跡的であるはずで、両者を区別する理由がない。(Fieser [2005] p.12)。

確かに、この二つの奇跡を区別する理由がないという批判は検討に値するようと思われる。そこで、これらを証言者の質と証言内容という二つの観点から比較検討してみよう。

「八日間の暗黒」は、証言者の質を完全に具えており、また「世界的に著名な場所で公然と生じた」という条件も満たしているように思われる。つまり、一定の精神的確実性に達しているので、この出来事を伝える記録や伝承が全て嘘・誤りなのではないかという疑念は通常起きないし、あえてそのような疑いを呈することはむしろ合理的な態度ではない、とヒュームは考えているのであろう。

これに対し「女王の復活」では、女王の死去の目撃者は極めて狭い範囲に限られ、またこの出来事を今に伝えているのは歴史家達だとされている。この場合、歴史家達が揃って事実を述べていないという疑いは十分可能であろう。つまり、「女王の復活」とは、女王が引退しその後復権したという政治的事件の比喩に過ぎないという可能性である。女王の偉大さを強調するために、死からの復活という題材を用いることは、陳腐であり逆効果でさえあるかもしれない。また、英国王室・政府と何かしらの利害関係にあるとは限らない歴史家達が揃いも揃ってなぜそのようなレトリックを用いるのか、これも不自然といえれば不自然である⁽⁷⁾。だが、そもそもこの「女王の復活」は思考実験であって、証言者の質を低下させる疑念の余地がありうるという点こそが問題なのである。

以上のように、両者の奇跡的出来事はその証言者の質において格段の差があることが確認された。前者は十分な立証に達し、後者は達していないということである。それでは証言内容の評価に関してはどうであろうか。

「八日間の暗黒」では、地球全体が完全な暗黒に包まれるという内容は受け入れるべきだが、学者は同時にその原因を探求しなければならないとも言われている。例えば日食や火山の噴火は一時的かつ局地的にはあるが暗黒をもたらすものであり、その種の現象を探求せよということであろう。「八日間の暗黒」は自然の通常の経過の侵犯ではあるが、自然法則に完全に反しているわけではないかもしれないからである。つまり、奇跡ではなく「驚異」だったという可能性をヒュームは捨て去ってはいない。

それでは「八日間の暗黒」は自然法則によって説明可能な「驚異」に過ぎず、ヒュームは結局のところ奇跡一般の可能性を却下していたのではないか、という批判があるかもしれない。しかし、我々は、奇跡論におけるヒュームの問題が、「奇跡は生起しうるか」ではなく「奇跡

の生起を支持する証言を信じることは合理的であるか」であったことを思い起こすべきである。「八日間の暗黒」の内容をひとまず受け入れ、同時に自然的な原因がありうるか検討することは、「賢明な人」の態度としては不整合ではない。そして、原因が見つかるまでは、その内容を奇跡として受け入れるか、少なくとも判断を保留するべきなのである。

他方「女王の復活」は、既に証言者の質に疑義がある以上、「一般的格率」の条件を満たすために、証言内容の信頼性は「八日間の暗黒」以上のものが要求される。しかし、瀕死からの回復ならばともかく、死者の復活という事例はかつて経験されてこなかったものであり、自然的原因によって説明可能だとも思われぬ。無論ヒュームはそうした原因の探求を禁止するわけではないが、その発見の可能性は限りなくゼロに近いと彼は考えていたに違いない。すなわち、ヒュームにとって「女王の復活」は、証言者の質も証言内容も低評価しか与えられず、従って「一般的格率」を満たさない事例だったということになる。

ここで強調しておきたいのは、「女王の復活」は決してアプリオリに却下されているのでもなければ、証言内容の信じ難さのみをもって否定されているわけでもないということである。仮にそれが「八日間の暗黒」と同様に完璧な証言者の質を具えていれば、ヒュームはそれを信じるのが合理的とは言わないまでも、判断保留を勧めた可能性は十分あるのではないか⁽⁸⁾。

ともあれ、ヒュームには「八日間の暗黒」と「女王の復活」とを区別する十分な理由があることが確認されたと思う。端的に言えば、前者は「一般的格率」を満たしており後者はそれを満たしていないのである。無論「八日間の暗黒」は思考実験であるがゆえに理想的条件をクリアしているのであり、ヒュームはそのような出来事がこれまでいかなる歴史の記録にも見だされていないと認めてはいる。それは歴史的・経験的事実である。

また、現実に世間に満ち溢れている奇跡は、単なる奇跡譚であれ、宗教的奇跡であれ、「女王の復活」の類なのであろう。その種の奇跡（の証言・記録）を軽信するのが合理的でないことは、やはり過去の経験によって判定されている。かのレー枢機卿がサラゴサの奇跡を反証にも値しない嘲笑の対象だと一蹴したのもそうした一例であり、それは合理的態度なのである。

3. まとめ

本稿の結論をまとめよう。ヒュームにおいては、証言者の質を評価するのも経験ならば、証言内容を評価するのも経験である。そしてこの二つの評価をもとにその証言が合理的に信じるに値するか総合的に判断するのが「一般的格率」である。「一般的格率」によって得られた評価が一定の精神的確実性に達すれば、それは「この種の証言は信じるに値する（しない）」という信念を生む。もちろんこの信念は誤りの可能性を含んでいるかもしれないが、それを訂正するのも経験である。以上のプロセスにアプリオリな議論が介在する余地はない。従って、奇跡の生起を支持する証言を信じるのが合理的となりうる可能性は最初から排除されているわ

けではない。⁽⁹⁾

また、宗教的奇跡を支持する証言は、それが提示される目的（宗教的目的）を除いては通常の奇跡を支持する証言となら違いはない。ただ、それは特定の宗教体系を確立すると同時に他の宗教体系の破壊を目的とするものでもある以上、結局自らの信頼性の低下を招き、それゆえ本来の目的を達し得ない。この議論は経験の如何に関わらない強力な議論であって、ヒュームの宗教的奇跡に対する拒否の根幹をなしている。

以上のようなヒュームの議論は、ルートが指摘するように、我々の日常感覚や認知活動⁽¹⁰⁾にある程度合致するように思われる点で、「自然ではあるが平凡」なのかもしれない（Root op.cit, p.431）。しかし、それは彼の経験論の哲学からの当然の帰結でもあった。フォグランの言葉を借りて本稿の締めくくりとしたい。

それでは彼の議論はアポステリオリなものに過ぎないのか？「過ぎない」という言葉は的外れである。ヒュームの根本的コミットメントからすれば、一体他にどのような形式をとろうかというのだろうか。（Fogelin op.cit, p.62）

【注】

- 1 ヒュームに対する同時代人による批判についてはフィーザー [2005]などを参照。
- 2 イアマンによれば、ヒュームは奇跡を「自然法則に対する侵犯」と定義することによって、ある出来事を奇跡とみなすか否かは観察者次第である、とするスピノザ、ロックらによる主観主義的理解を退けた。だが一方で、奇跡の信頼性を評価するにあたって目撃者の証言という主観的要素を取り入れてしまった（Earman op.cit, pp.8-11）。また、イアマンの見るところヒュームは「帰納の直線規則」を採用していたが、これは奇跡一般の生起可能性をきっぱり（flatly）ゼロにしてしまう荒っぽい議論である（Ibid. pp.22-24）。さらに、ヒュームの生きた18世紀中盤には、既に主観的な見込みや背景知識といった要素を変数として取り入れ確率を数量的に算定する手法がベイズ（T.Bayes）やプライス（R.Price）らによって確立されていたが、ヒュームは彼らと交流があったにも関わらずその洗練された理論の真価を理解できなかった（Ibid. pp.24-26）。以上のイアマンの批判に対する反批判としてはフォグラン及びヴァンダーバーグを参照。Fogelin op.cit, pp.40-53./Vanderburgh op.cit, pp.52-57.
- 3 中才（2001）は本稿と同じく奇跡論を『知性研究』の先行する議論、とりわけ蓋然性に関する議論と結びつけ、整合的解釈を試みている。本稿ではヒュームの「一般的格率」（証言の信頼性の評価）に対しより焦点を当て、証言者の質と証言内容という要素を導入することでその定式化を目指した。
- 4 実はもう一つ、ヒュームにおいては「類比による蓋然性」が存在する。（E84）これは、原因同士が類似していれば結果も類似し、類比が完全であれば推論は決定的となる、というものである。しかしこれは推論において補助的な役割しか果たしていないし、広い意味では原因の蓋然性の一種と考えることもできるので、本稿では詳細は取り上げないこととする。
- 5 「賢明な人」は、言うなれば健全な推論を通して真なる信念を安定して生み出す能力（徳）を有する人間である。昨今の知識の哲学の主要トピックである信頼性主義や徳認識論を先取りした発想だとみなすこともあるいは可能かもしれないが、本稿のテーマからは外れている。
- 6 また、コールマン（D.Coleman）によればヒュームはそもそも証言の信頼性の評価に際し蓋然性を数量で計算するような手法を用いたか疑わしい。Coleman [2001] pp.200-205.
- 7 コールマンは、歴史家が政治的理由ないし愛国心によって筆を曲げた可能性を指摘しているが、そ

れはやや穿った解釈であろう。Coleman op.cit, p.219

- 8 ルートによれば、証言がどれだけ強く圧倒的であっても、超自然的出来事が生じたという証言を信じることは、決して合理的にはならないという。彼によれば、自然法則を疑うことは、それが前提している自然の斉一性を信じないことであり、ひいては自然の斉一性にに基づいている証言一般の信頼性を疑うことである。こうした解釈には説得力があるが、この論点を強調し過ぎることは、ヒュームの奇跡論を奇跡を信じるか自然法則を信じるかという単純な二者択一の問題に帰着させてしまうことに繋がるようにも思われる。Root op.cit, pp.435-436.
- 9 中才は、ヒュームが（非宗教的）奇跡の証言をアプリアリに退けているわけではない、という点を認めつつも、合理的な人物は奇跡の生起を信じない、「ヒュームは賭をしない」と結論する。本稿は必ずしもこの結論に反対するものではないが、それではなぜヒュームが奇跡の証言を合理的に信じて良い条件や事例を挙げたのか、という意図をより明確にしようと試みた点で異なる。中才 前掲書、pp.22-23.
- 10 ヒュームが日常的知識や道徳判断の形成手段として「会話と社交」を極めて重視していたことに留意すべきである。そうした場面において対話者の評判や態度が推論に影響を与えることは言うまでもないが、ヒュームに対する批判者はしばしばこの点を見落としている。

【引用・参考文献】

ヒューム『人間知性研究』からの引用は、Eと略記し、セルビー=ビッグ版の頁数を付した。セルビー=ビッグ版とは以下を指す。

Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals, edited by L. A. Selby-Bigge and P. H. Nidditch, Third Edition, Oxford: Oxford University Press, 1975

Broad, C.D. [1916/1995] : "Hume's Theory of the Credibility of Miracles", reprinted, *David Hume: Critical Assessments*, Vol.5, Routledge, pp.444-455.

Coady, C.A.J. [1992] : *Testimony : A Philosophical Study*, Oxford University Press.

Coleman, D. [2001] : "Baconian Probability and Hume's Theory of Testimony", *Hume Studies*, 27-2, pp.195-226.

Earman, J. [2000] : *Hume's Abject Failure*, Oxford University Press.

Fieser, J. [2005] : *Early Responses to Hume's Writings on Religion (II) 2nd Edition*, Thoemmes Continuum.

Fogelin, R.J. [2003] : *A Defense of Hume on Miracles*, Princeton University Press.

Root, M. [1989/1995] : "Miracles and the Uniformity of Nature", reprinted, *David Hume: Critical Assessments*, Vol.5, Routledge, pp.427-443.

Taylor, A.E. [1976] : "David Hume and the Miraculous", *Philosophical Studies*, Arno Press.

Vanderburgh, W.L. [2005] : "Of Miracles and Evidential Probability : Hume's "Abject Failure Vindicated", *Hume Studies*, 31-1, pp.37-61.

林誓雄 [2010] : 「ヒュームにおける社交・会話と人間性の増幅－自然的徳論に関する一考察」, 『イギリス哲学研究』, 33, pp.35-50.

北島雄一郎 [2010] : 「ヒュームの因果概念と奇跡論」, 『龍谷大学哲学論集』, 24, pp.33-51.

中才敏郎 [2001] : 「ヒュームにおける奇跡と蓋然性」, 『人文研究』, 53-1, pp.15-30.

【2015年9月7日受付, 11月5日受理】

A study of Hume's "Of Miracles"

NAKANISHI TAKAHIRO

David Hume is one of the few philosophers who realized the role and value of the testimony. And, He was also interested in examining the historical miracles. Some commentators of Hume's "Of Miracles" argued that he had rejected or excluded the occurrence of genuine miracles a priori. They say, for Hume, the miracle is by its nature against the natural law or the unity of experiences, and thereby cannot be reasonable to believe. But, This interpretation, broadly accepted, is wrong, or at least misleading. At first, Hume's aim was not to prove that miracle cannot occur, but to provide a reasonable standard of assessment of testimony in general. Secondly, reported (putative) miracle should be examined by that standard a posteriori, and not by definition or nature of the miracle. To prove my interpretation, in this paper, I introduce two components of the testimony, i.e. "quality of the witness" and "contents of the testimony". And if the former is very high, while the latter is somewhat incredible, the reported events can be believable.